

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第78号

平成30年11月13日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

「正四位下檢非違使兼河内守楠公碑」拓本掛軸

— 明治36年以前に制作された貴重な資料 —

四條畷楠正行の会に寄贈いただきました

文化6年(1809)、小楠公墓所境内に「正四位下檢非違使兼河内の守楠公碑」が建立されたことについて、楠正行通信第63号(平成30年2月13日発行)でお知らせしました。そして、京都大学貴重資料デジタルアーカイブスに掲載の拓本掛軸を転載しました。

そして、この度嬉しいご縁を頂き、このホームページをご覧になった東京在住の方を通じて拓本掛軸をご寄贈いただきました。ご寄贈いただきましたのは岩崎清人氏(宇都宮共和大学非常勤講師)です。

尊攘館の維新資料一つ

この拓本掛軸の入手の経過と制作年代について京都大学附属図書館に問い合わせましたところ、以下のことが分かりました。

この拓本掛軸は、吉田松陰の遺言を受けて、品川弥二郎が創設した尊攘堂旧蔵の維新資料コレクションの一つで、明治36年6月寄贈の軸物約300点の一品で、昭和46年9月、京都大学附属図書館の所蔵品として正式登録をされたものです。

岩崎氏の前所有者の家では、少なくとも昭和30年代には手許にあり、その後数十年にわたって床の間に飾っておられたとのことでした。

いずれにしても、明治36年以前に制作されていたことが分かりました。

江戸時代後期の漢学者・儒学者である村瀬栲亭の撰で、



正四位下檢非違使兼河内の守楠公碑全文約2000文字の内、前半の約1800字は長文の「序」で、「銘」は208字からなるものです。

ここに掲載する釈文は、妹尾和夫著「村瀬栲亭」(潮流社刊)に載るものを転載しました。また、略解は扇谷が作成したものです。

村瀬栲亭撰

《碑》 正四位下檢非違使兼河内守楠公碑

《銘》

臆哉楠公 克世厥勲 奉若遺訓 乃義乃仁
社稷安危 依頼一人 人倫大節 負荷一身
延元已降 天步滋艱 車駕南巡 皇統如線
豺虎猖獗 海宇麻乱 劇賊漫淫 覬覦寇邊
維公出奇 神化鬼變 挫銳嘗田 逐北瓜生
虜軍土崩 棄兵霧散 江北震驚 悉衆來攻
公據孤城 抗節彌堅 發誓宗社 致命王廷
精貫白日 氣烈秋霜 三千一心 敗八萬衆
電發龍驤 斬獲如菅 賊酋頽靡 殆授其元
甲血淋漓 馬斃兵殫 豈戰之罪 天耶其命
昆弟伏劍 不辱其名 史策所記 炳然猶新
誠忠至孝 孰如公全 千載之下 日月爭光
爰以堅石 于甲可南 以諗來者 弔古於焉

(釈文) 妹尾和夫

いかなんこう よそいさおしよ
臆なる哉楠公 克く厥の勲を世にす
いくんほうじゃく
遺訓を奉若して 乃ち義乃ち仁
しゃしよくあんき
社稷の安危 一人に依頼し

人倫の大節 一身に負荷す
いこう ます かた
延元已降 天歩 滋ます 艱く
しゃか いとすじ
車駕南に巡りて 皇統は 線 の如し
やまいぬとらしょうけつ かいう
豺 虎 狙 獺 し 海宇麻と乱れ
げきぞくまんいん すき うかが へん あだ
劇 賊 漫 淫 し 鬯を 覷 いて 邊に 寇す
た き い きへん
維だ 公奇を出だして 神化鬼變
えい こんだ くじ に うりう お
銳を 菅田に 挫き 北ぐるを 瓜生に 逐う
どほう
虜軍土崩し 兵を棄てて 霧散すれば
つ
江北震驚し 衆を悉くして 來たり 攻す
こじょう よ あ いよ
公孤 城に 據りて 節を 抗ぐる こと 彌いよ 堅く
誓を 宗社に 發し 命を 王廷に 致す
精は 白日を 貫き 氣は 秋霜よりも 烈なり
三千 一心 八萬の 衆を 敗る
りゅうじょう ちがや
電發 龍 驤 斬獲 菅 の 如く
たいび こうべ
賊酋 頽靡して 殆んど 其の 元 を 授く
りんり たお つ
甲血 淋漓 馬 斃れ 兵 殫くは
か
豈に 戰之 罪ならんや 天なる 耶 其れ 命なるか
こんてい はずか
昆 弟 劍に 伏して 其の 名を 辱 しめず
へいぜん
史策に 記する 所 炳 然 猶お 新たなる が ごとし
た まった し
誠忠 至孝 孰れか 公の 全 きに 如かん
千載 之下 日月と 光を 争う
こ た お
爰こに 以って 石を 堅つ 甲可南に 于いて し
つ こ
以って 來者に 諒ぐ 古を 弔する 焉こに 於いて せよ

(略解) 扇谷 昭

嗚呼良くも、正しいかな大楠公。国家、王室のため世に
尽くした功績は極めて大きい。

遺訓を残す。義を尊び、仁を尽くせと。

朝廷の興亡、一人嫡子正行公に託す。

人としての道、それは国家、主君に対する大きな節操と、
正行公、父の遺訓を継いでその任に応える。

湊川で正成が倒れた後、天下の形勢は非常に困難な状況
にある。

後醍醐天皇は吉野に入ったが、皇統は岩穴から一筋湧き
出るいづみのようなひとすじのように衰えている。

尊氏ら賊軍は激しく暴れ回り、海、山、天、空などしび
れるほど乱れてしまった。

勢いの激しい尊氏ら賊軍は、ほしいままに巷にあふれ、
争いの糸口を探しながら辺境を奪い取ろうとしている。

しかし、正行公は優れており、まるで神のように不思議
な変化、策を繰り出す。

藤井寺の戦い 教興寺に細川顕氏の精鋭を夜襲で破り、住
吉天王寺の戦いでは山名時氏、細川顕氏の大軍を瓜生野か
ら火を放ち大川・渡辺橋に潰走させた。

敵の軍は土が崩れ落ちるように一挙に崩れ、大川に溺れ
る兵を見捨て都に向けて一目散に敗走した。

尊氏ら足利勢は連戦連敗に震え驚き、全国からことごと
く兵を集め京の都を発進した。

正行公は河内東条に全軍を集め、皇統のために尽くすと
いう志を固く守って変えずに、ますますその志を高々と掲
げた。

その誓いを宗廟と社稷、すなわち国家に示し、乃ち死を
覚悟して正統な皇統に尽くすと。

正行公らの誠心は輝く太陽をも貫き、その覚悟のほどは
厳しい秋の霜をも凌駕する程である。

正行軍3千の精兵は心・思いを一つにして戦いに臨み、
八万の敵の軍を次々と撃破した。

その勇敢な戦いぶりは、龍が天に上る如く威勢に優れ、
稲妻のように電光石火出撃し、敵兵がまるで原野に咲く茅
の如く、ことごとく討ち取った。

敵将、高師直は正行公の勢いに怖れ逃げ隠れ、討ち漏ら
しはしたものの、賊軍の頭はいただいたのも同然である。
鎧を付けた兵士は誰もが血滴り、多くの兵馬は倒れ、悉く
尽きてしまった。

戦のもたらす罪は大きい。しかし、天下のため、命を捧
げたものである。

正行公、正時の兄弟は、刀折れ、矢尽き破れたが、その
名声を決して汚してはいない。

歴史上の記録によれば、明らかに新しい時代の先駆けと
なった。

正行公の示した天子への忠義、父、正成公への孝行、い
ったい他に誰がこの忠孝両全を成し遂げることが出来た者
がいたか。

正行公は、千年の歴史を経てもなお今、太陽そして月と
その光を競う輝かしい誇らしい存在である。

ここにおいて正行公をしのび、銘を刻み石柱を建てる。
その地は甲可村、雁屋の地である。

四條畷を訪れ、正行公の事績を顕彰し、弔おうとする者
は、ここ、小楠公墓所に参られよ。

(文責『四條畷楠正行の会』代表 扇谷昭)